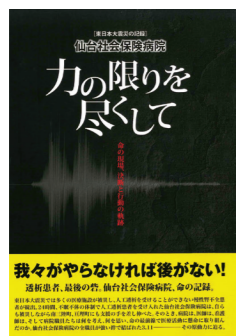




緑豊かで閑静な紫山地区に完成した新病院。近隣エリアでは屈指の総合病院となる



仙台社会保険病院(現、JCHO仙台病院)の職員たちが残した、東日本大震災当時の記録や写真を書籍化。今後の大災害に備え、経験と教訓を国内外に伝えている
上:地震発生から復旧までの実録、「力の限りを尽くして」。医師、看護師、薬剤師、事務局など、職員それぞれの行動と思いがつけられている
下:震災当日から10日間の患者食卓、栄養ケアをまとめた「食が支えた命の現場」



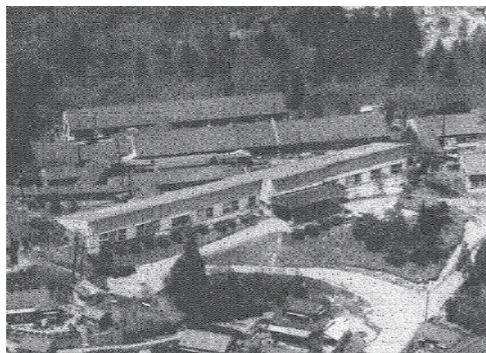
information

独立行政法人地域医療機能推進機構
ジェイコー

JCHO仙台病院

住所 / 仙台市泉区紫山2-1-1
TEL / 022-378-9111
(4月30日までは022-275-3111)
※5月1日開院、5月6日から外来診療開始
※4月28日までは堤町で診療中
WEB / <https://sendai.jcho.go.jp/>

文 / 池田直美 写真 / 門山夏子 写真提供 / JCHO仙台病院 デザイン / HMデザインワークス



1955年ごろ、迎花園健康保険仙台療養所時代の写真



雲柄の壁紙や優しい色をあしらった、小児科外来の診察室

巻頭特集

地域の医療をけん引し約70年のJCHO仙台病院

高みを目指す医療の現場

感染拡大が止まらない新型コロナウイルス。
いまだに被災地を揺るがす東日本大震災の余震。
不安が続く日々の中で、命を預けられる場所が近くにあるのは心強い。
この春、紫山にJCHO仙台病院が移転する。
全国から患者が通う同院の強みと、新たな試みについて紹介していく。



JCHO仙台病院
村上栄一 院長

岩手県奥州市出身。1981年東北大学医学部卒業。同大学整形外科に入局後、釜石市民病院副院長、JCHO仙台病院副院長などを経て、2019年より現職。日本仙腸関節研究会代表幹事

地域密着の親切的な医療と世界に先駆けた最新の研究

建物の老朽化などにより、仙台市泉区の紫山に建設を進めていたJCHO仙台病院の新病院が完成した。1952年に青葉区堤町で迎光園健康保険仙台療養所として始まり、後に仙台社会保険病院、現在のJCHO仙台病院へ。名前こそ変わったが、約70年の歴史の中で移転は初となる。

泉エリアでは新参者。果たして地域の人々に受け入れてもらえるかという不安や、従来の患者が遠くになってしまう難点もある。しかし、「新しいことを始めるときには、良いも悪いも付き物。必ずステッパアツプになると信じています」と、村上栄一院長。新病院と一緒に未来を見据える。

新病院では3年ぶりに小児科が復活。コロナ禍での受診控えや少子化から、小児科経営は厳しいともいわれるが、「儲かる、儲からないではない。地域に必要な医療を提供し、子どもから親、祖父母まで、家族皆が安心して通えるかかりつけ医を目指したい」と、村上院長は話す。小児科医の中でも消化器、アレルギー、内分泌の専門医3名を迎え、地域の小児医療の中核を担う。

もう一つの目玉は、村上院長がセンター長を務める日本仙腸関節・腰痛センター。仙腸関節由来の腰痛の治療法を確立した、日本におけるパイオニアだ。移転を機に、国際仙腸関節研究所を設置。すでに海外の

巨理町へ医療支援にも赴いた。

同院も震災で被害を受けている。建物の一部が半壊し、約150病床が使用不可に。それでも病院機能を維持し、透析患者の受け入れから沿岸部の支援まで行えたのは、命を救いたいという医療の原点と、どんな状況でも皆でやりくりしようとするJCHO精神から。

「我々がやらなきゃ後はない。私たち医療従事者って、そういうときに、ものすごいエネルギーを出すんですよ。家族も心配でしたが、震災当時は全職員が任務を果たすのに必死でした」と、村上院長。10年前を感慨深く思い返しなが、「大変だったけど、我々だからできることがあると、再確認できた貴重な経験でもあります」と語った。

村上院長は、高校生まで獣医を志していた。それは実家が農家で、父が馬で山から木を運搬する仕事もしていたため、馬への思いが特別大きかったからである。しかし、動物の安楽死を知って、胸を痛めるようになった。安楽死にはさまざまな背景

チームと共同研究を進めているという。紫山から全国、世界へ。地域と共生しながらも、グローバルな規模で最先端の医療を提供していく。

5月1日の開院を前に、真新しい病院の前で今月号の表紙を撮影した。地域とともに、どこまでも高みを目指そう!。村上院長が声高らかに言うと、副院長や看護部長、事務部長も一緒にガッツポーズ。新境地への期待と意気込みを表した。

我々がやらなきゃ後はない 命の最前線で最後の皆

職員一丸となり、ワンチームでの医療を掲げる同院。総合病院では珍しく、医師のオフィスである医局はワンフロアなのが特徴だ。「患者さんの容態から、他の科で診た方が良い場合もあります。院内で紹介状必須の病院も多いですが、当院は医局で医師同士が気軽に相談できるため、連携がスムーズにいくんです」と、村上院長が教えてくれた。診療科の壁がないから、職員の帰属意識が高く、チームワークが良い。その絆をより強めたのは、東日本大震災だ。

東北屈指の腎疾患医療に取り組む同院は、県内の最終拠点でもある。田熊淑男前院長の「やるしかない!」という号令のもと、震災直後は患者の安全確保に追われる中、停電や断水、津波被害で機能を停止した37の医療施設に代わり、透析患者を受け入れた。職員総出で透析器械を24時間フル稼働。震災翌日から7日間で1759人の人工透析を行ったという。さらに、南三陸町や

や考えがあり、一概には言えないが、「自分の一生をかけた仕事として、目の前の命を救うために働きたい」と、村上院長は医療の道を選んだという。そして今も、人の命の最前線で闘い続けている。

「地域医療で一番大事なのは、適切な対応。村上院長がそう話すように、同院では患者に思いやりを持って接するのはもちろん、紹介や救急車の受け入れを極力断らない方針で進めている。現在のコロナ禍においても、地域の医療機関としての役割を全うするために、職員が一致団結しながら日々奔走している。今私たちに必要なのは、改めて感染予防を徹底し、自分も周りの人も健康でいること。「健康のためにも、まずは明るくいきましょう。笑顔で前向きに考えよう」とすれば、大変なときでも活路を見出せるものです。笑いには免疫力を高める効果があることも、研究で証明されていますから」。村上院長は、そうアドバイスをして締めくくった。マスク姿でもわかるビッグスマイルで。